



世界ミステリ全集

15



ウサギは野を駆ける
かまきり
死体をどうぞ

セバスチアン・ジャプリゾ
ユベール・モンテイエ
シャルル・エクسブライヤ



早川書房

世界ミステリ全集 15

セバスチアン・ジャプリゾ

「ウサギは野を駆ける」榊原晃三訳

ユベール・モンティエ

「かまきり」斎藤正直訳

シャルル・エクسブライヤ

「死体をどうぞ」三輪秀彦訳

廃止

1973年5月20日初版印刷

1973年5月31日初版発行

発行者 早川 清

東京都千代田区神田多町2〜2

発行所 株式会社早川書房 東京都千代田区神田多町2〜2

電話 東京(254)1551〜8 振替 東京47799

印刷所・株式会社享有堂印刷所 製本所・株式会社明光社

本文用紙・本州製紙株式会社

表紙クロス・本州リンソン／英国ワトソン社製

函紙・駿河製紙株式会社

製函所・株式会社佐藤製函所

定価970円

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えます〉

0397-807150-6942

目次

ウサギは野を駆ける 3

かまきり 121

死体をどうぞ 251

S・ジャプリゾ／H・モンテイエ／

C・エクスブライヤへ座談会 415

セバスチアン・ジャプリゾ著作リスト 437

ユベール・モンテイエ著作リスト 438

シャルル・エクスブライヤ著作リスト 439

ウサギは野を駆ける

セバスチアン・ジャブリゾ
榊原晃三訳

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1973 Hayakawa Shobo

LA COURSE DU LIÈVRE
A TRAVERS LES CHAMPS

by

SÉBASTIEN JAPRISOT

Copyright © 1972 by

ÉDITIONS DENOËL

Translated by

KOZO SAKAKIBARA

Published 1973 in Japan by

HAYAKAWA SHOBO & CO., LTD.

This book is published in Japan by arrangement
with ÉDITIONS DENOËL through
BUREAU DES COPYRIGHTS FRANÇAIS.

恋人よ、われわれは休息を見出す前に
動揺する老いた子供にすぎない。

ルイス・キャロル

まえがき

まず、デイヴィッド・グーデイスの本《不吉な金曜日》^{ブラッディ・フライデー}（《十三日の金曜日》）を脚色することが問題だった。

ところが、わたしにはできなかった。自分自身の本でさえ絶対に脚色できなかったわたしのことだ。わたしは四方八方手をつくして、別の物語を物語る。そして、ここに辿り着いた。わがプロデューサーであるセルジュ・シルベルマンに勇気づけられて——わたしの泥沼から突き出た片腕の先端にしがみついたと言うべきだろうが——（しかも、シルベルマンはわたしの要請によりいろいろな権利を買ってくれたのだ）、わたしはその本のことを忘れ果て、わたしの心をかすめたことを物語ったのだ。それは《さらば友よ》や《雨の通行人》のためにやったのと同じことだった。

書く前に、わたしは数度カナダに赴いた。そこで生活した。すでに冬が腰を落ち着けていたが、突然、赤と金色に輝く小春日和の日がやってきて二週間ばかり続くことがあった。わたしは迷路のように入りくむセントロローレンス河のいくつかの支流や、あのわたしの登場人物たちが避難する島を、頭の中にたたきこんだ。あるときなど、モントリオールの、河岸の芝生の上で、太鼓のとどろきや金管楽器のきらめきの中で、わたしは長い間立ちどまり、バトンガールたちのパレードを眺めたものだった。

《ウサギは野を駆ける》が本当に始まったのは、まさにあそこだった、と思う。数カ月間は不安だった。

どういうふうに書いていいのか、何を書いていいのか、さっぱりわからなかったからだ——それに確かに、もうそれ以上は絶対に書けそうになかったからだ——それから、何かが、まさに互いに噛み合うことによつて生ずる小さな事柄が、思い出とともに生まれ、そして話も、それを語る方法も、それを語りたいという欲望も、すべてがしかるべき位置に置かれ、仕事に取りかかる段取りがついたのである。

わたしは妹のことを考えた。わたしたちが子供だったとき——妹はわたしより二歳年下だが——妹は大人に変装して遊ぶことが好きだったが、必ず自分をバレエの踊り手と見なししていた。そして後年、彼女はその踊り手になった。しかし、そうなる、彼女はもう大人の真似をしなくなった。わたしはいつも、大人の真似をするのは本当に子供なのかどうか、あるいは、現実には結局昔見た夢の実現する見込みのない複写にすぎないのではないかと自問したものだった。妹はブリマ・バレリーナになったとき、すでにスターになっていた。

《ウサギは野を駆ける》の中では、子供たちが、マルセーユのある街で、アメリカにいつて摩天楼の中でホールド・アップをする遊びをしている。一方、アメリカでは、大人たちが、ある機構を通して、本当に摩天楼を攻撃している。この機構のすべての要素——愛情関係、言語、態度、そして本質的な事柄に至るまで——は、子供の世界に属しているのである。

むずかしいのは——お望みなら遊戯と言ってもよいが——二つの物語の歯車が互いに様に噛み合うことができるようにすることだった。ひとたび成功し、注意深く重ね合わされると、二つの物語は、さまざまな事実の果てに、より秘密な、より熱狂的な第三の物語を暗示することができた。

わたしは「推理の“物語を書くことを選んだ、それは、この推理の物語が、わたしが生来小声でしか語ろうとしないことを口にするのに便利なアリバイになっているからである、とわたしは確信している。こうした推理の物語においては、数々の事件が、声を限りに叫んだり歌ったりできるような大騒動を作り出す。読者にもっとも身近な物語のみが同意する。」

映画の場合は事情が異なる。スクリーンはメランコリーを持っているものである。スクリーンは叫び声を上げながら観客をすっかりあばき、だれもがあなたを指でさし示す。あなたのささやかな歌がスクリーンの歌に唱和し、あなたの声がバレードの金管楽器や太鼓にまぎれて苦もなく応唱し、そして飼いなさられたスクリーンが、そこで互いに姿を認め合うのは他人であるあの鏡となるように、すべてのことをフィルムの上に描くためには、魔術師が必要である。

しかし、わたしは頭上に一つの星をいただいている。ルネ・クレマンがやってきたのだ。

一九七二年八月　パリにて

ウサギは野を駆ける

太陽が輝いているある日——われわれだれにとつてもただ一度だけの、と言うつもりなのだ——の夕方近いころのマルセーユの旧港。

他の場所でもかまわない。バルセロナでも、ナポリでも、香港でも。が、とにかく、わたしが生まれたのはマルセーユなのだ。

この旧港の近くに大寺院があり、その裏の庶民的な界限を走る一本の通りがある。この通りに、引越し荷物を積んだトラックが一台とまっていた、二人の男が鏡のついた衣裳だんすをおろしていた。トラックは空家になった古ぼけた本屋の店先にとめられている。その店に残っているのは、色褪せた看板だけだ。いや、ほかにもう一つ、よごれたガラス窓に一枚のポスターが貼りつけられたままになっている。そのポスターには、木の上のたった一匹の猫が描かれ

ている。歯をすっかりむき出しにしてにっと笑っている猫だ。

この猫の微笑の下に、さびしげで、所在なげな様子をしている、十歳の少年が佇んでいた。

この少年は、大きな白いボタンのついた濃い紫色のピロイドの上衣で、日曜日のような装いをしている。彼は母親と七歳になる妹のかたわらで、本屋の入口に背を向けて立っている。母親は三十歳、まったくのブロンドで、小さな娘をしっかりと脇に引きよせている。女の子もブロンドで、きれいな白い服を着ている。

この店に住んでいるのは、この女と二人の子供だけなのだ。女の顔には、不幸だった生活のしるしが刻まれていた。衣裳だんすを持った運送屋を通そうとして、女が少年の腕をひっぱって脇へ寄った。一瞬、三人の影がたんすの鏡に映った。

それから彼女は少年のほうに身をかがめた。

母親「ティトゥ、そとへいって遊んでおいで。友達を見つけておいで」

少年はしぶしぶ従った。彼は右手のビー玉の袋をしっかりと握りしめる。前方の地面に落ちているマッチの空箱をじっと見つめながら、歩道を進んだ。

それをひろおうとして身をかがめた。

と、突然、ほかの男の子の足が少年の前に現われて、マチ箱を踏みつぶしてしまった。

ティトゥは身体を起こした。すると、彼の前に、同じ年か少し年上くらいの三人の少年が立っていて、敵意のこもった眼差しで彼を見つめた。彼らはみすばらしい服装をして、とても浅黒い肌をしている。いちばん年上の少年は、片方の耳に金色の輪をつけている。

ティトゥは抵抗する力がないのであらずさりした。それから、三人の少年に背を向け、大急ぎでその場を離れた。そこにある路地の階段を駆け上がった。ビー玉の袋をしっかりと握ったままだ。

が、彼はすぐに立ちどまった。別のグループの子供たちが、階段のいちばん上のほうに坐っていて、彼の通り道をふさいでいるのだ。

男の子が四人に、女の子が二人だ。女の子の一人は人形を抱えている。もう一人は、パイを齧っている。男の子の一人は、小さなゴムまりをおもちゃにしている。

みな、この濃い紫色のビロードの上衣を着た新参者を、じっとしたまま見つめていた。それからティトゥが近づいていった。すると、子供たちは、一人また一人と立ち上が

り、彼の前面に向かってきた。何か不思議な夢のように、過ぎ去ってしまったことのように、失われてしまったもののように、ゆっくりと……。

ティトゥは、そのグループの首領らしいいちばん年長の少年の前に立ちどまった。彼は笑いかけようとした。相手の少年はきびしい眼つきで彼を詮索するように見たが、それは敵意のこもったものではなかった。冷静な、常に一人でことを処理し、ほかのものから一目置かれている少年であることがわかった。

仲間になるために、仲間として受け入れてもらうために、そこでティトゥは、相手の少年の腕の先に、自分のビー玉の袋をさし出した。

相手の少年は仲間たちを眺めた。ポケットから赤い柄のついた小さな小刀を取り出すと、その刃の先で袋を無造作に切り裂いた。

ビー玉が、色も豊かに、少年の足の下にとび出した。そのおびたらしい玉が、階段にぶつかって、四方にとびはねるとき、われわれはもうマルセーユにはいない。

*

ここは、カナダとアメリカ合衆国との国境にある、ある